
恐くない幽靈

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐くない幽靈

【Zコード】

N8104A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

ある日、僕は幽靈を見た。その幽靈は、柳の下にいかにも幽靈です！という恰好で佇んでいた。どこをどう見てもちつとも恐くない。その幽靈が、僕に頼み事をしてきたけれど……。

その幽靈を見たのは、川沿いの柳の下だった。柳の下に幽靈だなんて、あまりにベタ過ぎやしないか？ それに、その幽靈ときたら、白い着物を着て白い三角巾までしていた。もちろん、足はない。黒く長い髪をたらして、両手はお決まりの幽靈のポーズで、胸の前にダランと下げていた。これで『うらめしやー』なんて言つたら、ぶん殴つてやるうかと思つた。

あまりに人間を馬鹿にしている。

僕は今までに何度も幽靈を見ている。だから、幽靈を見たってちよつとやそつとじや驚かない。最近の幽靈は人間とほとんど変わりない。たまにゾッとするような幽靈を見たりもするけれど。そういう幽靈は、かなり怨念が強い。取り憑かれるままにから、なるべく近寄らないようにしている。

この幽靈は、今まで見た幽靈の中では最低レベルだ。ちつとも恐くない。

僕は彼女を無視して、柳の木を通り過ぎようとした。

『あ、あの……』

蚊の鳴くよくな声で、女の幽靈は僕を呼びとめた。

『あのー』

聞こえないふりをすると、もう一度声をかけてきた。それでも無視して通り過ぎようとしたら、幽靈は僕の後にスッと近寄つて来た。

『なんだよー』

僕はムツとして振り返る。幽靈はヒュツと驚いて後ずさりした。幽靈の方がビッククリしてビックする。

『……』

幽靈は黙つて俯いた。泣きそつた顔をしている。

『私、恐くないでしようか？……』

「は？ 全然！」

僕は、キッパリ即答した。

「今時、そんな古めかしい幽靈つていないぜ。お化け屋敷にもいな
いんじゃないのか？」

『やつぱり……』

幽靈は、はあーっと深くため息をついた。その暗さだけは、幽靈
っぽい。

『私、死んでかれこれ二百年近いんですけど……誰も怖がってはく
れないんです』

「だろうな」

僕は幾分軽蔑した眼差しで彼女を見る。一〇五年前とこりと江戸時
代だ。随分長く幽靈やつてるよな。

『あの、お願ひです。私を見て怖がつてもらえませんか？』

「は？」

『幽靈が見える人は少なくて、たまに見えたとしても誰も怖がつて
くれないんです』

「だつて、恐くねえもん」

幽靈だけにしつこいのは分かるけど、僕はちょっと苛ついてきた。
『困るんですけど……私もそろそろ成仏したくて、神様にお願いしてい
るのですが、自分で自分の身をあやめた物は、成仏させてもらえない
のです』

『しようがねえじゃん、自分でやつたことだろ？』

『そんな……』

幽靈はシクシクと泣き出した。

『私だつて、死にたくて死んだ訳じゃありません……家が貧しくて
貧しくて、私が死ねば少しは家族がひもじい思いをしなくなると思
い、命を絶つたのです……』

『はあ……』

そんなこと言われてもなあ。当時は今と違つて苦労も多かつたつ
て思つけれど……。

『神様は約束してくださいました。もし、私が誰かをものすごく怖がらせることが出来たら、成仏させてやる』

「えつ？ 神様が？」

神様もいい加減なこと言つよな……。僕が呆れていると、幽靈はススッと僕の方に迫つてくる。

『だから、お願ひです！ 私を見て怖がつてください！』

幽靈は必死に懇願する。お若さんみたいに顔の一部がつぶれているとか、口裂け女みたいな口をしてるとか、のつぺらぼうとかろくろく首とかだったら、少しは恐いかもしない。でも、彼女普通の顔してゐるし……。幽靈特有の青白い顔をしてゐるけれど、生きていた時は割と美人だったかも。

「はあ、けど、恐くないんだよね」

僕は思つたままを口にする。それを聞いて、幽靈はまた声をあげて泣き出す。その泣き方がとても辛そうで、僕は少しだけ、幽靈に同情してきた。

「……じゃ、怖がつてやるよ。驚きやいいんだ」

「本当ですか？」

幽靈は泣くのをやめ、僕をじつと見つめる。

怖がつてやるよ。これも幽靈助けだ。僕は幽靈を凝視すると、『ワーッ！』と叫んだ。自分でもわざとらしさと感じた。僕には俳優の素質はないらしい。

『……』

幽靈は恨めしそうな目をして僕を見つめる。

『ダメです……本気で怖がつてくれないと』

「無理」

僕はフーとため息をつく。『』をどう見りや恐いって言つんだ？ 人間の死体の方がよっぽど恐いぞ。僕は、じつくりと幽靈を見つめる。

と、柳の枝が風に揺れ、僕の方へなびく。しなつとした感触が首に走り、僕は手で首を触る。すると、何かが地面に落ちてきた。

「ギャーーッ！！

巨大な毛虫が、僕の首から地面に落ちて動いている。毒々しいオレンジと黒の毛虫がもぞもぞと地面を這う。僕は恐ろしさのあまり、もう一度凄まじい悲鳴を上げていた。

『……あ、ありがと』

怖がる僕を後目に、幽靈は微かに微笑む。そして、ゆっくりと僕にお辞儀をすると、スッと消えていった。

僕の毛虫嫌いのお陰で、あの幽靈は成仏出来たようだ。良いことをした、と思いつつも僕は毛虫から逃れるために、一目散にその場を走り去って行つた。幽靈よりも、僕は毛虫が恐い！　完

(後書き)

「夏のホラー特集」として出でやうかと思つてたんですが、全然ホラーじゃなくて…ジャンルホラーには出来そうもなかつたので(^ ^ ;)、個人で投稿しました。

恐いものも、人それぞれ…。でも、毒々しい毛虫には注意を！じんましんで、ものすごいことになる場合もあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8104a/>

恐くない幽霊

2010年10月9日09時30分発行